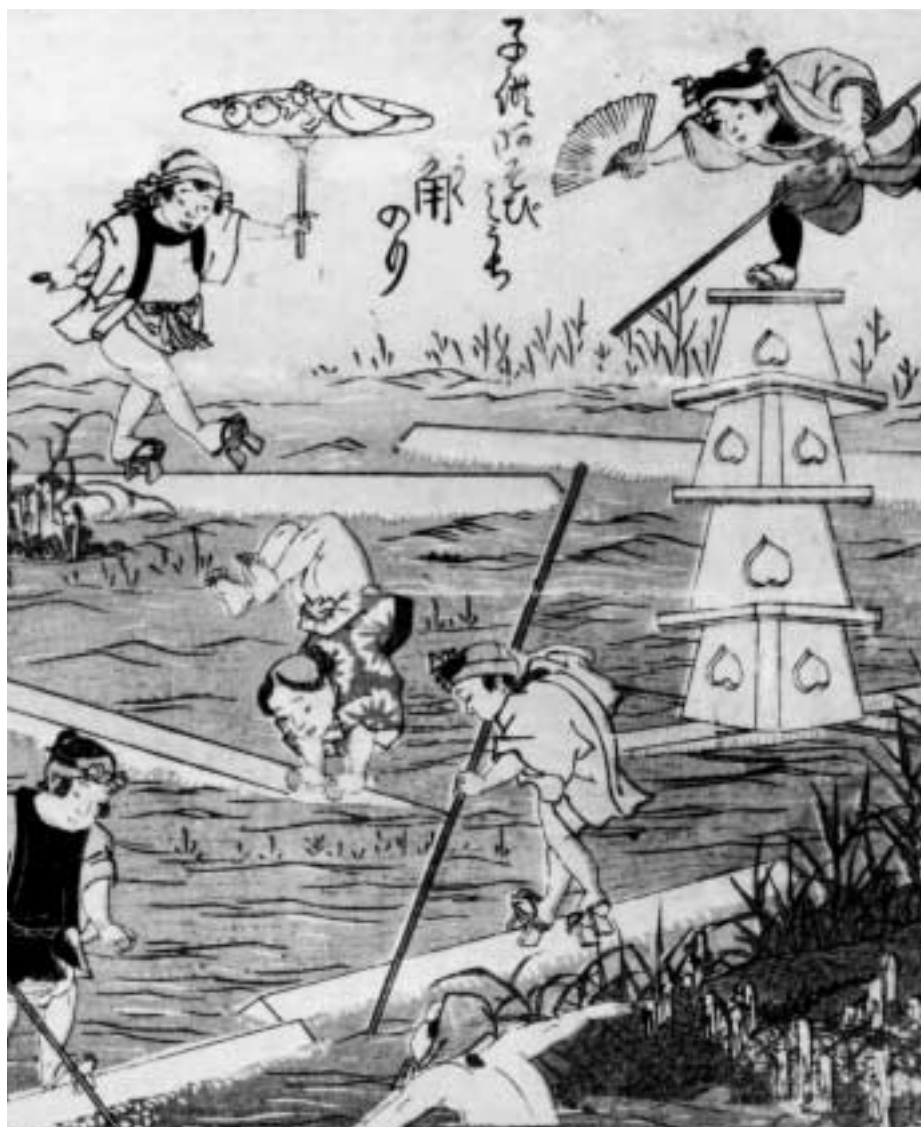


歴史と文化を考えよう

04 江東区文化財保護強調月間



一勇齋国芳画「子供あそびのうち角のり」(部分) 江東区教育委員会所蔵

下町文化

NO. 227
2004.9.28

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.tokyo.jp/~bunkazai

04江東区文化財保護強調月間
江東区の歴史と生活展
小学校ができたころ
江東区と初等教育のあゆみ

公開講演会 旧大石家特別公開
民俗芸能大会 歴史さんぽ

伝統工芸展

中川船番所資料館特別企画展
入り鉄炮に出女 - 通関制度と中川番所 -

江東歴史紀行
「伊東甲子太郎
深川の道場主から新選組幹部へ」

囲炉裏ばた(大石家日記)
真夏の庭掃除
あるく・みる・きく・かく文化財レポート
荒川放水路と江東区

今年もまもなく文化財保護強調月間を迎えます。教育委員会では「歴史と文化を考えよう」をテーマに、10月2日から11月3日までの約1か月間、さまざまな催しを行います。

今年の公開講演会は近世考古学を扱う目新しい内容となりました。江東区で現存する唯一の茅葺古民家・旧大石家住宅の特別公開も6回目を迎えます。

更に、3年振りに歴史と生活展が月間期間中に開催されます。そして、民俗芸能、職人さんたちも相変わらず元気です。地域の歴史のなかで育まれてきた民俗芸能や匠の技の数々をご覧ください。

ぜひこの機会に、江東区の歴史と文化にふれてみてください。

江東区の歴史と生活展

「小学校ができたころ

江東区と初等教育のあゆみ」

公開講演会

「江戸を掘る

江戸遺跡の現状と課題」

旧大石家住宅特別公開

民俗芸能大会(江東区民まつり)

伝統工芸展

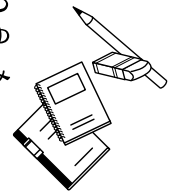
歴史さんぽ

「江戸時代の新大橋通り

大島から森下へ」

小学校ができたころ

—江東区と初等教育のあゆみ—



読み方の教授（大正6年「明治尋常小学校卒業アルバム」） 中村千鶴氏寄贈

今年度の歴史と生活展では、江東区の小学校の歴史をテーマに取り上げます。現在江東区には43の小学校があります。このうち14校はその前身を明治期あるいは江戸期にまでさかのぼることができ、歴史ある小学校です。以降、地域の変遷とともに小学校教育も充実したものへと変わり、小学校の数も増えていきました。

本展示では、江戸時代後期の教育情勢から明治時代に入り近代教育制度が確立していくなかでの公立小学校の様子、そして関東大震災という大きなダメージを乗り越えた学校教育の再開までを「江戸時代の教育」「明治政府と学校の設立」「義務教育制度の確立」「関東大震災を乗り越えて」という4つのコーナーで構成していきます。ここで各コーナーについて簡単に紹介します。

「江戸時代の教育」
明治時代の近代教育の基盤は言うまでもなく江戸時代に築かれたものです。幕府による学問所や諸藩で設けた藩校では高い水準の教育を施していました。それ以外にも、私的な教育機関である家塾・私塾・寺子屋などは多くの子どもたちに修学の機会を与える重要な施設で、明治期の小学校の設立と関係のあるものも少なくありません。このコーナーでは、明治初年に近代教育の礎となった教育機関や区内に存在した寺子屋などについて紹介します。

「明治政府と小学校の設立」
明治時代になると政府の手で小学校の設置が進められていきます。明治5年（1872）に国民教育制度を規定し、学校教育の目標を明確にした学制が公布されますが、その2年前の明治

3年に、最初の公立小学校が深川の長慶寺内に開校しました。同7年には東京府の公立小学校には校名と番号が定められ、江東区域の小学校には1番、3番、7番の番号がつけられました。現在からちょうど130年前のことになります。ここでは、江戸から明治へと時代が変わり、教育の近代化が進められる中での小学校の設立状況や、経費の問題でなかなか思うように進まない学校設立問題と地域の関係、当時の学校生活について見ていきます。

「義務教育制度の確立」
明治時代後期から大正時代にかけて、産業の近代化と経済成長によって国民生活が向上し、それにもなつて教育への関心も徐々に高まっていきます。このような背景の中で教育制度も整えられていきました。ここでは、小学校の制度が確立し、小学校が現在と同じ6年制になるまでの道のりを紹介していきます。

「関東大震災を乗り越えて」
大正12年9月1日、ようやく軌道に乗った教育界を関東大震災が直撃します。最後のコーナーでは、大きな被害を受けた学校が、露天、仮校舎を経て、新築の校舎で授業を再開するまでと、震災後の人口移動によって新たに増設された小学校について概説していきます。

また鉄筋コンクリートで造られた新校舎の設備を写真で紹介いたします。



元加賀尋常小学校通知箋（伊東吉左衛門氏寄贈）

さらに、区民の皆様より寄贈された民俗資料から、教科書や通信簿をはじめ卒業アルバム、学校で使用された文具類などを展示します。また、関東大震災後に鉄筋コンクリートで新築された深川区15校の写真や、東京市臨時建築局による明治小学校の建設図面などは今回はいじめての展示となります。

みなさんのお住まいの地域の小学校、あるいは卒業された小学校の歴史をさぐりに是非お出かけ下さい。

会期 10月2日（土）～7日（木）
時間 午前9時30分～午後5時
会場 深川江戸資料館地階レクホール
（白河1 3 28）



震災後に新築された臨海尋常小学校（昭和2年）

入場無料（但し深川江戸資料館を見学する場合は別途観覧料が必要となります。）

公開講演会 10/6(水)

近年、東京23区内の発掘調査が進み、近世都市江戸の新たな事実が次々に明らかになっていきます。今回の講演は、発掘された遺跡・遺物からどのようなことがわかるのか、さらには江東区に遺跡は眠っているのかなどについてお話ししていただきます。

演題 「江戸を掘る」

講師 早稲田大学人間科学部教授

谷川章雄

日時 10月6日(水)

午後6時30分～8時30分

会場 江東区文化センター

(東陽4 11 3)

旧大石家住宅特別公開

旧大石家住宅は、150年以上前に建てられた区内最古の民家です。ふだんの公開日は土・日曜と祝日ですが、文化財保護強調月間の期間中に限り、特別に平日も公開いたします。

庭にはベーゴマ、座敷にはめんこ・おはじきなど昔なつかしいおもちゃも用意してあります。

場所 旧大石家住宅(南砂5 24地先)

仙台堀川公園内ふれあいの森

時間 午前10時～午後3時

受講無料

定員 50人(申込み多数の場合抽選)

申込 文化財係まで往復はがき

強調月間協賛事業 時雨忌講演会

10月12日は松尾芭蕉の命日です。

芭蕉記念館では、この日にちなんで記念講演会を開催します。

日時 10月10日(日)

午後2時～3時30分

演題 「現代詩の窓から見た俳句」

講師 詩人 清水哲男

定員 80人(先着順)

申込 電話(3631 1448)、または記念館(常盤1 6 3)まで直接

10/18(月)～10/24(日)



ベーゴマを楽しもう!

江東区民まつり

民俗芸能大会 10/17(日)

江東区で江戸時代に生れ、受け継がれてきた民俗芸能を一挙公開いたします。

演目次第(予定)

【午前11時～12時30分】

東京都指定無形民俗文化財

「木場の角乗」

木場角乗保存会

【午後1時～3時50分】

東京都指定無形民俗文化財

「木場の木遣」

木場木遣保存会

江東区指定無形民俗文化財

「砂村囃子」

砂村囃子睦会

江東区登録無形民俗文化財

歴史さんぽ 10/31(日)

「江戸時代の新大橋通り」

大島から森下へ

江戸時代の新大橋通りは、現在の通りとは違う道でした。それではどこが新大橋通りだったのでしょうか?

今回は、鬼平宅跡へもちよつと立ち寄りながら、江戸時代の新大橋通りを

大島から森下へと散策します。五百羅

漢寺跡、猿江神社、旧新大橋跡などを

見て歩き、古道をめぐる江東区の歴史

にふれてみてください。

日時 10月31日(日)

入場無料



表紙の絵と見比べてみましょう。

東京都指定無形民俗文化財

「深川の力持」

深川力持睦会

会場 都立木場公園入口広場

ふれあい広場(木場4丁目)

集合 江東区総合区民センター

(大島4 5 1)

午後1時～3時半

講師 深川江戸資料館 久染健夫

定員 30人(申込み多数の場合抽選)

参加費 保険料30円

申込 往復はがきに、住所・氏名・

年齢・電話番号を明記のうえ、

文化財係までお申し込みくだ

さい。

締切 10月20日(水) 必着

伝統工芸展 10/29(金)～11/3(水・祝)

入場無料

江東区無形文化財(工芸技術)保持者に認定された職人さんたちの作品を一堂に展示します。伝統的な技術によって、一つひとつ手仕事で作られた工芸作品を目にすることのできるまたとない機会です。今回で23回目を迎える本展で、多くの作品や技の実演を通して伝統文化を実感していただきたいと思えます。

会場 森下文化センター(森下3 12 17)
時間 9時～17時(最終日は16時まで)
11/1(月)はお休み

実演公開

10/29(金)・11/2(火)

9時半～15時半

10/30(土)・10/31(日)・11/3(水・祝)

10時～15時半

期間中、会場では職人さんの仕事を間近に見ることができます。日ごろ、見ることでできない職人さんの仕事ぶりに接しながら、お話を楽しんではいかがでしょうか。下記の日程表をご参考



技の体験(提燈に文字を描く)

照のうえ、お出でください。

職人教室(技の体験)

10/30(土)・10/31(日)・11/3(水・祝)

10時～15時半

職人さんの仕事を体験することができます。モノを作ることの難しさや、出来たときの喜びを味わえることでしょう。

【申し込み】

当日、会場2階受付にてお申し込みください(先着順)。なお、事前申し込みの体験もあります。詳しくは下記の日程表をご覧ください。なお教材費がかかりますのでご注意ください。

チャリティーバザール

期間中、森下文化センターの1階ロビーでは、江東区伝統工芸保存会主催による工芸品の即売がおこなわれます。販売している方たちも職人さんですので、気軽にお話をしながら、じっくりとご覧になってください。

伝統工芸技術の実演公開日程

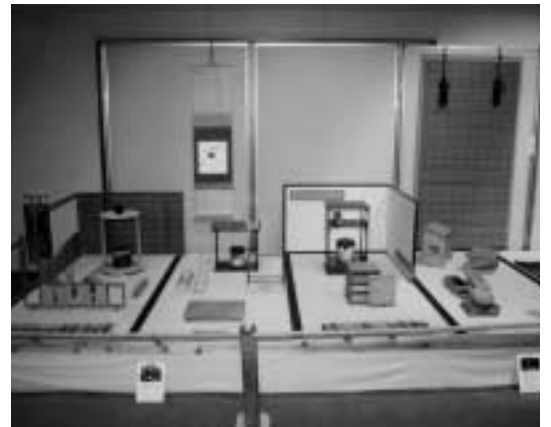
平日実演日程

日	時	9:30～11:30		13:30～15:30
10/29(金)		木工(彫刻) 岸本忠雄 べっ甲細工 磯貝 實	昼休	庖丁製作 吉實庖丁店
11/2(火)		木工(指物) 山田一彦 刀剣研磨 白木良彦		木工(襖櫓・椽) 鈴木延坦

休日実演・職人教室(体験)日程

日	時	10:00～12:00		13:30～15:30
10/30(土)		江戸切子 小林英夫 費200円・定員9名 3人ごと40分交代 木工(桶) 川又栄一 仕舞袴製作 杉浦武雄 帯の実演	昼休	提燈製作 杉田礼二 費500円・定員10名 庖丁製作 吉實庖丁店 象牙細工 前田賢次
10/31(日)		木工(指物) 山田一彦 費2,000円・定員10名 縫紋 天野一政 表具 岩崎清二		更紗染 更浜(美弥好) 費2,000円・定員7名 建具(組子細工) 木全章二 費500～1,000円・定員10名 表具 岩崎清二
← あめ細工 青木喜 →				
11/3(水・祝)		簾製作 豊田 勇 費500円・定員4名 江戸切子 須田富雄 裁着袴製作 富永 皓	昼休	手描き友禅 和田宣明 費3,000円・定員6名 2人ごと40分交代 紋章上絵 石合信也 刀剣研磨 白木良彦
← あめ細工 青木喜 →				

は体験受け付け可能です。教材費がかかります。なお、印の体験は、事前申し込みが必要です。電話にて、文化財係03(3647)9819まで、お申し込みください。定員を超える場合は抽選となります。しめ切りは10月22日(金)です。



展示の様子(江戸指物)



江戸切子(角溝菊繫紋水指)

平成16年度 江東区 中川船番所資料館特別企画展

入り鉄砲に出女

通関制度と中川番所



【江戸時代の通関制度】

(3階常設・企画展示室)

江戸時代、幕府は峠や渡し場に関所・番所を設け、街道を出入りする人・ものを検査していました。小名木川と中川の合流点(中川口)にあった中川番所もそのひとつです。

関所・番所では、「入り鉄砲に出女」といわれるように、鉄砲と女性の通行を厳しく監視していました。今回の特別企画展では、この「入り鉄砲に出女」に焦点を当て、その実態について取り上げます。また、中川番所での通関の様子から、江戸時代の関所制度における中川番所の位置についても紹介していきます。



栗橋関所跡(埼玉県栗橋町)

【出女】女性の関所通行

幕府は大名の妻子だけでなく、一般の女性の移動も厳しく制限しました。しかし実際には、関所・番所を巧みにくぐり抜けて、多くの女性が旅をしていました。江戸時代に描かれた浮世絵などから、女性の旅のようすを展示します。

【中川番所の機能】

中川番所は利根川・江戸川から江戸へ出入りする川船を監視する関所として、重要な役割を果たしました。数少ない中川番所に関する史料をもとに、中川番所の具体的な機能について考えていきます。

【関所の実態】(3階パネル展示)

江戸時代の関所には、どのようなものが置かれていたのでしょうか。また、関所を通るには何が必要だったのでしょうか。絵図面から見た関所内部のようすや、人々の旅の姿などをもとに、関所の実像に迫っていきます。

【関東周辺の関所・番所】

(1階エントランスロビー)

関所・番所は明治になって廃止されましたが、その歴史を伝える資料館や記念碑、案内板などが、今でも全国各地に点在しています。1階の展示スペースでは、江戸時代に描かれた街道の絵図と現在のようすを対比させ、関東周辺の関所・番所を紹介します。

江戸時代の人々にとって、関所とは、また中川番所とはどのような存在だったのか、



関所絵図(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

中川番所のジオラマがある常設展示室もあわせてご覧になると、より一層理解が深まることでしょう。この機会に、ぜひご来館ください。

江東区中山船番所資料館

期間 10月27日(水)～11月28日(日)

休館日 11月1・8・15・22日(月)

時間 午前9時30分～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

観覧料 大人200円

小・中学生50円

伊東甲子太郎

— 深川の道場主から
新選組幹部へ —

伊東の生い立ち

伊東甲子太郎は新選組の幹部になった人物で、その名前をご存知の方も多いでしよう。しかし、多くの新選組のメンバーがそうであるように、経歴や人物像については、不明な点が多いのが実情です。それだけに歴史小説の題材になりやすいともいえますが、区文化財（史跡）として、伊東が深川で開いていた道場跡（佐賀1-16付近）が登録されています。

伊東は元鈴木姓で、旗本本堂氏（八〇〇石）の家臣・鈴木専右衛門忠明の長男として常陸国新治郡志筑（茨城県千代田町）に生まれ、名前は大蔵、諱は武明、誠齋と号しました。実弟には、のち伊東とともに新選組に加わった鈴木三樹三郎がいます。伊東は天保6年（1835）生まれですから、新選組副長の土方歳三と同じ年でした。父専右衛門は、有能な人物で一時重く用いられましたが、反発も多かったようで、家老のために閉門蟄居の処分になったとされ、その後、祖母の里方（茨城県八郷町）へ移りました。ここで

伊東は幼少期を過ごし、やがて水戸へ遊学しています。水戸では剣を神道無念流の金子健四郎に学び、武田耕雲齋と親交を結んで、尊王攘夷を主張する水戸学の影響を受けたようです。

その後江戸へ出て、深川にあつた北辰一刀流伊東誠一郎の道場に入りました。伊東道場に入門した時期は、安政末年もしくは文久元年（1861）と推定されています。このときはまだ鈴木姓でしたが、誠一郎が病没すると、その遺言と門弟たちの推挙によつて娘うめの婿となり、伊東道場を継ぐことになりました。甲子太郎の名は、上京して新選組に入隊した元治元年（1864）甲子の年の干支にちなんだものです。

『補修 殉難録稿』中篇に、「武明、其性温和にして敏達、幼きより国学を好み、歌道にも心を寄せ、又武芸を嗜み、特に、剣術に長ぜり」と記されており、伊東は諸芸に秀出していたことがうかがえます。

伊東の深川道場

伊東甲子太郎の深川道場については、

その実態を知る史料が残されていません。ただ唯一残っているのが、道場を継ぐ前、まだ伊東が鈴木大蔵と名乗っていた文久元年7月に、弟の三樹三郎が姉ことの嫁ぎ先である関家に送った書状です。

この書状の趣旨は、妹よしと要造という者との縁談がまとまったと報告したもので、よし（もしくは要造）が、嫁ぎ先の家は要造の兄をはじめとして同居人が多いため、暮か春に家宅ができるまで、深川の伊東道場に頼んで仮住まいさせてほしい旨を依頼してきた、という内容です。三樹三郎は、兄（甲子太郎）も入塾しているので、8月には誠一郎へ要造を見習いとして頼みたいと述べています。見習いとは、道場への仮入門のことでしょう。さらに三樹三郎は、兄が塾頭をしているので都合が良いと記しています。

そして道場のようすについては、二度深川の道場へ行ったが、なかなかの大家であり、「小身の旗（旗）本位の様子に御座候、熟（塾）生も十人余り御座候」と述べています（書状の内容に



切絵図に見える伊東道場



現在の伊東甲子太郎道場跡
（佐賀1-16付近）

については、小野圭治郎『伯父 伊東甲子太郎武明』掲載の写真を参考にし、写真に写っていない箇所は、市井浩一『高台寺党の人びと』の引用文で補いました。小野氏前掲書には、伊東道場には塾生10人のほかに「常に五六十名の門弟が出入りし」ていたとあり、他の文献もその記述を踏襲していますが、同書は歴史事実と矛盾する記述が多く（松浦玲『新選組』）、門弟が50〜60人いたというのも典拠（史料）が示されていないため、注意が必要です。

江戸時代後期の深川には、桑田立齋宅跡（清澄2-13付近）、佐久間象山砲術塾跡（永代1-14）、西尾藩藩校典学館跡（深川1-6）、坪井信道日習館跡（冬木22）がありました。つまり、この頃の深川という地域は、武芸・洋学などの「学芸・教育の場」でもあったのであり、こうした事実ももっと注目されてよいでしょう。

新選組への加入・離脱と油小路事件
新選組局長の近藤勇は、元治元年9月に江戸へ下りました。このとき、伊東と面識のあった隊士藤堂平助の仲介で、伊東や三樹三郎らが新選組に加わることになります。

伊東は、新選組に加入して上京するため、深川の道場をたたくので、妻うめを三田台町（港区）へ転居させたといわれています。

それにしても、伊東はなぜ深川の道場を引き払ったのでしょうか。たとえば近藤勇の道場「試衛館」は、近藤が新選組の局長として京都で活動しているとき、多摩地方の門弟が道場の留守を預かっていました。伊東の深川道場が50〜60人もの門弟を抱えていたのが事実だとすれば、たとえ伊東をはじめとする数人が上京して新選組に加入したとしても、深川道場を引き払わなけ



伊東甲子太郎像（鈴木家蔵）

していきま

慶応3年（1867）3月、伊東ら十数名は、前年12月に崩御した孝明天皇の御陵衛士（高台寺党）として、新選組か

ればならない理由にはなりません。このあたりの実情を明らかにすることは、これからの課題であるとともに、とかく人物像というのは虚飾されがちです。今後の史料の発掘が望まれます。

また、伊東が新選組に加盟したのは、これまでは伊東と近藤が「攘夷」で共鳴したからだ、と説くものが多かったのですが、松浦玲氏はその説を首肯することができないとして、「伊東は京都進出への足掛りに新選組を使おうとし、新選組の戦力を増強したい近藤が伊東とそのグループの力量に魅力を感じて受け入れたというあたりが真相だろう」（『新選組』）と述べています（そのほか最新の研究成果は、宮地正人『歴史の中の新選組』、大石学編『新選組情報館』をご参照ください）。

いずれにせよ、上京したあとの伊東と近藤は、しだいに意見の違いが表面化

ら離脱しました。当時、新選組を脱退した者は切腹という鉄の掟がありましたが、御陵衛士は新選組の分派と考えられていたのでしょうか。しかし、政権を武家から公卿へ移行させようとする伊東と、あくまで幕府権力の弱体化を防ごうとする近藤との考え方の溝を埋めることはできませんでした。

新選組は同年11月18日、京都油小路で伊東甲子太郎を襲撃して暗殺します。

この事件は、坂本竜馬が近江屋で幕府見廻組に殺害された3日後の出来事でした。坂本・伊東ともに享年33才。伊東の遺体は、ほかの御陵衛士をおびき出すために七条通りへ運ばれ、遺体の収容に駆けつけた7人のうち、藤堂平助ら3人が新選組によって殺害されました。伊東甲子太郎の墓は、京都市戒光寺墓地にあります。

伊東は同年10月14日の大政奉還後に建白書を執筆しており、その新たな政権構想は、「大開国」論を前提として、五畿内を朝廷の直轄領とし、朝廷が直接政権を掌握するという独自のものとした（松浦氏前掲書）。

それともに見逃してならないのは、伊東が暗殺されたときに懐にあって書付で、たとえば「薩（薩摩）・土（土佐）・芸（広島）・宇和島・越前」は「王政御開国」、「長（長州藩）八王政攘

夷」、「会（会津藩）八補幕攘夷」というように、そこには影響力を持っていた諸藩の政治方針が記されていたことです（『大日本維新史料稿本』慶応3年11月18日条、東京大学史料編纂所蔵）。伊東の政権構想は、情報収集を行ったうえでのものでした。

慶応3年末（翌年が明治元年）には、さまざまな政治コースが未知の選択肢として存在しており、それは当時、「政治参加」を志すあらゆる階層の人々にとって大きな可能性でした。歴史の事実経過を知っているわれわれには、このことが理解しにくいのですが、伊東甲子太郎や坂本竜馬の暗殺は、将来への多様な可能性の抹殺にほかなりませんでした。

少なくとも、深川の道場主から新選組の幹部へ、そして御陵衛士へと転身した伊東の足跡は、幕末という時代を生きた彼自身の思想形成の軌跡であるとともに、在野の人々を巻き込んだ維新変革の大きなうねりの一つだったといえるでしょう。

（文化財専門員 小泉雅弘）

【注】教育委員会刊行の文献には、伊東甲子太郎道場跡として「佐賀1 16付近」以外の番地が記載されていますが、すべて誤記です。訂正してお詫びいたします。

真夏の庭掃除



今年の夏は、暑い日が続きま
まさに酷暑という言葉がピッタリで
た。その真つ只中の7月28日、友の会
の皆さんとともに、旧大石家住宅(南
砂5 24地先)の庭掃除を行いました。

大石家は、江戸時代に建てられた区
内最古の民家で、平成6年3月に区指
定有形文化財(建造物)になりました。
もとは東砂8丁目にありましたが、指
定にともない現在地に移築しました。
震災、戦災のみならず、幕末におこつ
た有名な安政2年の大地震(1855)
でも倒壊しなかつたと伝えられていま
す。このような幾多の困難を乗り越え、
現在まで残されてきました。

友の会には、同家保存のため、建物



裏庭での作業風景

の維持・管理をお願いしています。そ
の中心は、茅葺き屋根を守るため、
囲炉裏に火を焚くことです。そのほか
にも、室内の掃除をはじめ、年間をと
おして実施する様々な行事にご協力い
ただいております。今回の庭掃除もそ
の一環です。

裏庭には、薪用に多くの木材が積ま
れ、周辺の木々からの落ち葉などもた
くさん積もっていました。前日にも30
分ほど落ち葉を拾い集めました。作
業をはじめると、すぐにゴミ袋で10袋
ほどにもなり、掃除の大変さを思い知
らされました。そして、翌日も参加者
は汗を拭きふき黙々と作業に取り組み
ました。一部朽ち果てた木材は紐でま
とめ、落ち葉は「ゴミ袋に詰めるなど、
参加者全員で片づけた量は、想像以上
の多さでした。ほんとうにお疲れさま
でした。

今では、なかなか見ることの出来な
くなった古民家建築。茅葺き屋根の屋
内には囲炉裏を囲んで人々が集い、い
ろいろな話が交わされてきました。た
だなつかしいだけでなく、そこには日
本の建築文化があり、かつては人々に
よって語り継がれてきた口承文化があ
りました。友の会の皆さんによる維
持・管理への取り組みは、そのような
文化を支える大切な活動といえます。

あおく・みる・きく・かく 文化財レポート

荒川放水路と江東区

豪雨による甚大な被害を及ぼした新
潟県五十嵐川の氾濫は記憶に新しいと
ころですが、江東区もこれまで度重
なる水害に襲われてきました。明治43
年(1910)には荒川の決壊により、
亀戸と深川は見渡す限り水びたしとな
りました。荒川は明治40年にも決壊し
ており、国はこれを防ぐため、隅田川
に流れていた荒川を、中川の河口に付
け替えます。内務省の威信を掛けた土
木工事は、16年かかって昭和5年に完
成しました。この間、大正13年(19
24)には通水式が行われていますか
ら、今年で放水路通水80周年に当たり
ます。放水路の開削によつて、多くの
文物が移動を余儀なくされ、景観は著
しく変貌しました。

祐天堂(亀戸3 39)に「木下川や
くしみち道標」があります。葛飾区
の名所木下川薬師(浄光寺)への道標で
す。現在の墨田区仲居堀通りになりま
すが、木下川薬師は荒川放水路の工事
によつて若干東に移転しました(葛飾
区東四つ木)。亀戸から向う場合、荒川
放水路によつて大きく分断される形と
なりました。

江東区の場合、放水路は縦断するこ
となく、迂回する形で区境に合流した
ので、大きな影響は被りませんでした
が、もとの中川河口部は川幅が拡がり、
堤防が高くなったため東砂の一部には
その影響が及びました。

東砂に「おこり地蔵」(東砂8 19)
があります。明治初年、中川の川岸に
流れ着いた水死者の供養塚を、放水路
工事の際、現在地に移転させ、地蔵を
建てて供養したものです。

江東区と江戸川区を結んでいる葛西
橋は昭和38年に架橋された2代目の橋
ですが、以前は現在より上流に架かっ
ていました(史跡「旧葛西橋跡」)。小
説家永井荷風がこの葛西橋を訪れたの
は、放水路完成の翌年のことです。「葛
西橋の上より放水路の海に入るあたり
を遠望したる兩岸の風景は、荒涼寂莫
として、黙想沈思するによし」(『断腸
亭日乗』)。荷風が愛した荒涼寂莫さは
現在では窺うことはできませんが、地
域を一変させた荒川放水路は、人々の
暮らしと
ともに文
化財も水
害から守
つてきた
とも言え
ます。



旧葛西橋西詰正面
(昭和30年ころ)